會報

昭和十年六月 | 47 | 日本山岳會

獨逸遠征隊のナンガパルバット遭難記

(Fritz. Bechtold: Deutsche am Nanga Parbat, 1934.)

黒田孝雄

一九三四年ドイツのナンガパルバット登攀隊の生殘つた一人ベヒトルドによるその登攀記錄である。私は先づこの登攀の經過を述べて、紹介の一部に代へよう。

ドイツとしてはすでに一九三二年これを試登して居り、今回は第二回の試みである。第一回試登に參加したメルクルをリーダーとし、アシェンブレンナー、ベヒトルドの二名その他に、ドレクセル、ミュルリッター、ヴェルツェンバハ、ヴィーランド、ヒェロニムス、シュナイダー、ベルナルドの十一名を以つて登攀班とし、他にフィンステルヴァルデルレッヒル、ミッシュの研究班、インドからトランスポートオフィサーとしてサングスア、とフライヤの兩大尉が參加した。

一九三三年エヴェレスト登攀に輝かしい偉功を立てたシェルパとプティアとの擔夫等三十五名も登攀隊に加はり、六百名のキャラバンが、スリナガールを出發したのは四月末である。前回のルートを辿つて、十七日目即ち五月十五日にはすでにラキオット氷河の末端に、ベースキャンプ（三九〇〇米）を設けることができた。第二、第三とつゞいてキャンプは前進したが、その頃まで、すべての條件は順調に進んだ。六月七日になつて一行中のドレクセルが、肺炎に罹つて第三キャンプに急死したため、登攀隊計畫はかなりの齟齬を來すことになつた。ともあれ、その間に第四キャンプは着々と準備され、漸く二十二日になつて、メルクル、ベヒトルド、アシェンブレンナー、ミュルリッター、ヴェルツェンバハ、シュナイダーの前進隊が第四キャンプ（五九五〇米）に向ふことができた。ヴィーランド、ベルナルドは三日後れて出發した。第四キャンプから一行は、西チョングラピークに登つて偵察する餘裕さへあつた。第五キャンプはラキオットピークへつゞく最後の急な登りを前にして設けられ（六七〇〇米）、七月四日には、メルクル、ベヒトルド、ヴェルツェンバハ、ヴィーランド、アッシェンブレンナー、シュナイダーと十八名の人夫とがラキオットピークを高くからんで第六キャンプ（六九〇〇米）に達することができた。こゝは前回第七キャンプの設けられた『モーレンコップ』に當たる。

この間の天候は先づよい方であつた。第六キャンプ以上は風はつよいが、晴れては居た。それ以下は一面の雲海に包まれ、ナンガパルバット丈けが、その上に、島のやうに聳えて居た。ジルバーザッテルへの途中（七一〇〇米）に第七キャンプを設け、七月六日ベヒトルドは病氣の人夫二名と下へ降つたが、殘るメルクル、ヴェルツェンバハ、ヴィーランド、アッシェンブレンナー、シュナイダー及び十一名の人夫は第八キャンプに向つた。調子は極めてよく、一時間二百米の割合で、ジルバーザッテルをこえ、七九〇〇米に迄達した、見れば、彼等と主峯との間には尙長さ九〇〇米、高さ二四〇米の一の尾根が横たはつてゐたが、明日は必ず頂上に達し得るといふ自信と希望に一行は燃えて第八キャンプ（七六〇〇米）に歸つた。

しかし、運命はあく迄彼等に與しなかつた。その夜は風は相變らず强く吹いたが尙晴れて居た。翌朝になつて天氣は一時に急變し、ひどい吹雪となり、テントの外では呼吸さへ困難であつた。雪は殆んど水平に降りテントの支柱は次々と折れて了つた。第八キャンプを張る時は難なく穴を穿ち得たフィルンも、この時には鐵の樣に堅くなつて了ひ、こんな平らなフィルンでは穴を掘り下げることもできなかつた。八日になつても依然吹雪は吹き募るばかり、快復は全く望み得なかつた。こんな狀態の下に幾日も不完全なテントに止まることは勿論のこと、さればとて、頂上に向つて前進するのは更に愚舉であつた。ヴィランドとも相談の結果、この第一の試みはこれで中止、第四キャンプ迄一先づ降つて改めて再擧を期することに決した。

アシェンブレンナー、シュナイダーは先づ三人の人夫と共に先發し、道をつけることになつた。出發に當つてメルクル、ヴェルツェンバハ、ヴィーランドは、すでに下降の準備をして今にもすぐ後に隨ふ樣に見えた。ジルバーザッテルに出た時は吹雪は益々猛威を極め人夫のピンツオ・ヌルブとニマ・ドルジとが弱り出したがパサンは尙元氣であつだ。ニマ・ドルジは吹雪のため吹き倒れたが、その時彼の背負つて居たシュラーフザックは肩からもぎ取られルパールのスロープへ風船のやうに飛び去つた。彼は危く助けられたがこのときには五人に一つのシュラーフザックしか殘つてないので、第五か第四キャンプへどうしても降らねばならなかつた。吹雪のため十米と先は見えない。先きを急ぐがいつこうに捗らないので、第七キャンプの近くでアプザイレンしともかく各自の行動に幾分でも餘裕を與へた。この時殘の組がジルバーザッテルを今しも降りて來るのを吹雪のあひ間に認めることができた。第七キャンプのテ

ントは飛ばされずに殘つてゐた。第六への途中この先發組の疲勞は目に見えて來て三十米毎に休まねばならなかつた。すぐ後に續く筈の人夫達の姿はともすれば見えなくなる。第六キャンプは雪にすつかり埋れてゐた。ラキオットピークをこえて第五キャンプで幾らかの食物を口にし得たので疲勞もやゝ快復しシュナイダーとアッシェンブレンナーは其午後第四キャンプにベヒトルド、ベルナルド、ミュルリッテルに迎へられた

が同行の人夫も殘つた後組も、誰も降りて來ない。翌日レワを呼んで救援方について相談したが、この吹雪の中では何の手のつけやうがなかつた。十一時頃、吹雪の切れ目から一の組がジルバーザッテルのはるかに上を降りて來るのをこゝから認めたが、遭難は目捷に迫つて居るらしくても何の施す術もなかつた。吹雪は尙もつゞいて、十日の午後には六七名の組がラキオットを降つて來るのを認めたが、そのうち第四キャンプに救はれたのは、パサン、キタアル、キクリ、ダ・ソンデュ四人であつた。殘る一人は第五キャンプの近くで、二人はラキオットの降りでやられて居た。七月十三日には、いよ〳〵第四キャンプを引上げる筈になつたが、恰度その日第七キャンプの下のスロープにうごめく、三つの姿を認め、彼等の救ひの聲も吹雪を通してかすかに聞きとれたが、どうにもならなかつた。十四日になつて人夫のアンツェリンが半死半生の姿で降りて來た。彼れは最後に救はれた者である。彼の言によれば、七月九日ジルベルザッテルの下のキャンプを引上げた時にはガイライとダクシとアンツェリンは疲れて居たし、一部は雪盲に罹つてゐたのでそこに止まつた。こゝで十一日夜ダクシが死んだ。同じ朝アンツェリンは、ガイライと共に第七キャンプに向つて降つたが、その三十米手前で、雪に覆はれたヴィーランドの死骸を發見した。第七ではメルクルとヴェルツェンバハに會つたが、こゝに一夜を明し、食物もないので出來る丈け早く降りやうとしたが、メルクル達は、救助の來る迄待つやうに主張した。十三日曉方にはヴェルツェンバハが倒れて了つたので彼の死體をテントに殘して第六キャンプに向つたが、メルクルは二本のピッケルで漸く自らを支える程疲れてゐた。モーレンコップ迄再び登ることはすでに思付かないので、そのグラートの最低部に穴を穿つて、そこに寒い一夜を明した。十四日の朝になつて穴からはひ出て、救助を呼んだが、第四キャンプには何ら人姿も見えないので、メルクルに降るやうにすゝめた。彼も同意したが、メルクルもガイライも力なく、穴から二三米さへ離れることができなかつた。かくしてアンツェリンだけ第四キャンプに生還した譯である。

十六日になつてリッヂの上から救ひの呼聲が聞えたが、人の姿は見えなかつた。シュナイダー、アッシェンブレンナー、レセル、ミッシュ等の人々によつて、十五、十六、十七日と必死の救援が續けられたが、膝を沒する新雪では、その努力は第五キャンプ以上には及び得なかつた。かくして、救援を打切り十八日一行は第四キャンプを撤收した。

遭難した三人のメンバーは、ドイツとしては何れも秀れたクライマースであつて、メルクル（一九〇〇—一九三四）はドイツ國有鐵道の技術檢査官であり、一九二九年レヒル、ベヒトルドと共にコシタンタウの北山稜を登攀し、一九三二年第一回ナンガパルバットのリーダーであつたヴィーランド（一九〇一—一九三四）はシュナイデルと共にディーレンフルトのカンチェンに參加した一人でヴェルツェンバハ（一九〇〇—一九三四）はドイツのナンガパルバット登攀のそも〳〵の計畫者であつた。

遭難した六名のポーターは何れも優秀な成績をヒマラヤに殘したものばかり、ガイライは一九二二年エヴェレストにブルウスのサーヴアントとして參加し、ダクンは三三年のエヴェレストにポーターとして第四キャンプに活動し、ニマ・ドルジは同じ三三年のエヴェレストに參加して第六キャンプ迄に達した『タイヴァ』の一人であつたし、ニマ・タシは兩度のカンチェンにメスボーイとして參加しその第四キャンプに活躍し、ニマ・ヌルブは一九三三年のエヴェレストにメスボーイとして第三・四キャンプに、ピンツオ・ノルブは第二回のカンチェン及び一九三三年のエヴェレストには第五キャンプ迄達した。といふ何れもヒラマヤの强者ばかりで、彼等は、ネパールのソラ・ホンブ出のものである。

× × ×

ドレクセルも含んで、これらの十名の犧牲者に獻ぜられた本書は、上述の如き内容を持つた登攀記であると同時に、遭難記でもある。

その記述は、むしろ簡潔にして要領を得てゐると思はれた。この登攀記は、その完璧を期した記述ではなくて、簡素な日誌を綴り合せたものであり、詳細な報告は他の機會に委ねてゐる。そして、最後に科學的研究報告を摘錄して、本文六十八頁を終つてゐる。

この簡潔な報告の缺を補ふべき意味で、本書には八十面の寫眞が挿入されてゐるが、そのうちにはチョングラピークからのナンガパルバットの寫眞など素晴らしいのが入つてゐるが、何にはなくもがなの寫眞もかなりに入つてゐる。雪に埋れた第五キャンプや疲れ切つて第四キャンプに救はれた人夫の姿、パサンの凍傷の手など、この遭難の記錄としては貴重であらうが、讀者の目から見ては餘りよい感じを與へない。ドレクセルの遺骸をひき下す處なんかも餘りよい場面でない遭難後ベイスキャンプに落ちついたメムバーの毛脛を露にしたニコ〳〵姿と、兩手兩足を凍傷に繃帶した意氣消沈した人夫達を上下に對照した寫眞などもどんな氣持でこんな寫眞をのせたか、私には全く分らない。

寫眞の中に目ざはりになるのは、ナチスの旗である。ヒマラヤに入つてまでもナチスの鼻いきをうかゞはねばならない今日のドイツの登山家にはむしろ同情さへされて來る。

その遭難記から我々の敎へられる處は、多くある。ともかくこの事件は、九名の命を殆んど同時に奪ひ去つたといふ點に於て、從來ヒマラヤにその例を見ない椿事である。この椿事を中心として、各方面から多くの同情が寄せられてゐると同時に、揣摩憶測による不愉快な批難も相當に受けてゐる。

今回の遭難の原因が何處にあるか大いに我々の研究を要する點であらうと思はれる。けれども、彼等がヒマラヤそのものに對する認識が深くなつたことに根本の原因があるやうに見受けられる。—換言すればキャンプの進め方とその人員配置に當を得なかつたことである。七月六日、メルクル以下十六名の人員が第八キャンプにあつた時、ベヒトルドが下のキャンプに人夫と下つた外にはベルナルド等が第四に殘つてゐた外にはそれと第八との間の各キャンプには誰れも殘留して居ない。アドヴァンス、パアティは一途登頂を目ざし

て上へ登つて了つて、そしてこの間の連絡が完全に絶たれて居た事は、たとへこんな天氣の激變がなかつたとしても、全く正當な登り方とは云へない。この點に於てこのエクスペディションは全くなつてないと云つてもよい。各キャンプに一人でも二人でも殘つて居たならば、こんな天候の場合でも何等かの方法によつて連絡はつけられ、救助も相當に行はれ、終つて、一人でも犠牲を少くし得たのではないか。

この失敗に對する不評は不評として當つては居るけれども、ともかく隊長としてメルクルが最後まで殿りを勤めつゝ、自らその犠牲者の一人となつた行爲で、充分打ち消し得る償ひであるといつていゝ。

終りに本著には次の英譯が最近刊行されたことを附記して筆を擱く。

Adventures on Nanga Parbat: a Himalayan Expedition 1934. Translated H. G. Tyndale 1935.

一九三六年度英國ヒマラヤ遠征先發隊カルカッタ着

『一九三六年度エヴェレスト登山隊の偵察隊の一員であるテイルマン氏(pu. W. H. Tilman)が昨日當地着木曜の便船でロンドンからボンベイに到着の他の隊員を待つて居る。

ダーヂリン、五月十三日』

五月の山歩き

田邊主計

「五月の山歩き」と言へば、よく乾いたハイマツの中に身を埋めて、青空に輝く、まだ充分冬の姿の遠近の山々を眺めながら煙草でものんだり、また、ついウト〳〵とねてしまつたりする事が考へられるけれども この十二日から始まつた私の「五月の山歩き」は風や雨や又雪の日が續き時に穏かになつて日さへ照つて來ても、次の日が不安のため思切つて次のコースへ移れず、又、風雨の日を迎へるといふわけで、乘越(別山)の小屋に三晩をすごし——その前すでに天狗平の小屋でも三泊——天幕も澤山のコッペパンも、しきりにあくびをしてゐる始末であつた。やつと來た快晴らしい朝、その先の豫定(池平から毛勝へ)を中止して立山川をバンバシマへ下つて、そこに泊り、そのまゝ歸るのも殘念であるから、翌朝晴れたら早月尾根でも登れるだけ登るつもりが、目を醒ますとまた雨が降つてゐるではないか。そのうち追々良くなつて來そうだつたが、もう遲くもなり、かうなつた上は、少しでも早く切上げて歸り「貴重」な休暇をこの次に使ふ方が良からうといふ考へになり、十時頃雨も止んだので出發した。天氣は益々良くなりそうで、ゾロメキあたりからふりかへつて見ると劔の方は盛んに雲を吹上げてゐたが、やがて、伊析で辨當をひろげてゐる頃には、雲一つない青空になつてしまつて、當分天候も定まるかのやうに思はれて來た。しばらく荒れたあと、靜かな日が續くのも不思議はないが、どうも天候は私に對してだけ特に念入りに邪見にしたもののやうに思はれるのであつた。尤もこの邊で又悠々と引返すことが出來るのであつたら問題はないが、豫定通り出來なかつた事は何といつても心持を輕くせず、ほんとならば『夏がやつて來た。名乘りをあげよ郭公鳥』でも唱つて行くところであるが、今は馬鹿々々しく長く重いスキイをルクザクの上に結付けて、『夏だ。夏だアい』と言ひながら全く夏の旅のやうに汗びつしよりになつて釋泉寺へ急いで行つた。

立山川は雨の後でもあり朝のうち雪が堅かつたので上の方はアイゼンで降りた。この邊は落石があつた。雪も立てず雪の上を飛んで來る石には膽を冷すものがある。雪橋は未だあつたので徒渉はなくて濟んだ。

乘越小屋を八時に出たけれども、下へ來て、まだひるだつたので、又白萩川を上つて劔を見に行つたりしたのでバンバシマの宿泊所へ着いたのは三時であつた。

芦峅寺では佐伯宗作氏がなくなつてから日も經つてゐなかつたので村全體も未だ悲しみに沈んでゐるやうに見えた。殊に年をとつた人たちに會ふと「宗作も飛んだ事になつた」と聲を落して言ふのであつた。そして、そこから同行した人も何となく心地が浮かないやうに見受けられる時があつたのもこの爲かもしれなかつた。我々は、地獄谷で陷込んだ若い仲間を助ける爲めに、その雪の穴に飛下りて行つた彼の事を考へて默々と煙草をのんでゐる時がたび〳〵あつた。それでも、彼のなくなつた所を歩き、それらの山々を眺め、また悲しんでゐる人々にも會つたといふ事が、遠くにゐたまゝでは得られない、或る心安さを私に與へてくれるのであつた。

方々の小屋などの登山者名簿を見るとまるで毎頁のやうに宗作の名が見える。彼といつしよに歩いた人は隨分多い。なかには毎年いつしよに歩いた人もあるかもしれない。それらの人々の心に宗作は生きてゐる事であらう。

「山日記」會員割引の事

會員にして本年度山日記の購入希望者に對しては、本會事務所に保管してある殘部に限り前號通り二割引と致す事となりました。至急事務所に御申越願ひます

頒配價金八拾錢　送料四錢

備考、現金取扱の事。送金は申込と同時の事

申込部數に制限なし。可成振替貯金利用せられ度き事

山岳圖書展覽會目錄

山岳圖書展覽會の爲めに作製した目錄の殘部が若干殘つて居ります。右目錄は『山岳』第一號附錄として再錄される筈でありますけれ共、別冊は又それとして保存に値すると思はれますし、又實際に使用されるのには或は獨立の冊である方が便利かとも思はれます。勿論展覽會の目錄でありますから出品の品々に關する解說ではありますが可成り充分內外重要文獻を網羅し居り、且つは何れも內容解說發行年、發行所、判等夫々の要目が記錄されて居ます。從つて單なる出品物の解說といふよりも一つの山岳圖書解題として役立ち得るものと考へます、依而右の次第廣告致します。

目錄內容

解說內容內譯

和書	三十三點
洋書	百八十二點
地圖	三十四點
寫眞圖版	二葉

菊判　五十六頁

定價　並製金五十錢也(送料上製金壹圓也(四錢)

申込所　本會事務所

白頭山遠征フィルム映寫會

（第一回山岳懇談會）

時　五月三十日夜

所　大阪ビル、レインボー・グリル

京大白頭山遠征隊に參加した理事高橋健治氏の上京を機會に、氏持參の十六ミリ映寫會を催し、併せて氏を中心に懇談會を催した。時日の餘裕がなく辛うじて電話で友人知己を誘ひ得たに過ぎず、折角の好機を充分利用することは出來なかつたことが心殘りであつたが、少數乍ら同好者が高橋君を中心として食事を共にし、白頭山の色々の經驗を直接聽くことが出來たことは幸ひであつた。

席上之を機會に將來隨時山岳懇談會を催すことに決し次會幹事として中司文夫、岡本勝二兩氏を滿場一致で推薦した。當日出席者左の如し。

高橋健治　浦松佐美太郎　田口一郎　松方三郎　角田吉夫　高木正孝　岡田友治郎　宮島英郎　岡本勝二　谷口現吉　相馬順三　安田正介　國鹽研二郎　磯野計藏　田中菅雄　中司文夫　逸見眞雄　黑田孝雄　石原巖　近藤克二　中島啓四郎　田口二郎　渡邊漸

第二回山岳懇談會豫告

今秋匆々中央氣象臺の藤原咲平博士を中心として第二回山岳懇談會を催します。懇談會はその性質上一方的に博士の御話を聽くといふのではなく、こちらからも色々經驗や意見を述べることを建前として居り、博士は特に山登りをする者の側から質問や、經驗談などの出ることを期待して居られます。一夏の間に何卒山岳氣象について研究して置いていたゞくことを切に希望します。當懇談會出席御希望の方は

本會事務所內山岳懇談會係

宛に豫め御通知おき下さい。時日會場等決定次第後から御通知します。

第二回懇談會世話人

岡本勝二

中司文夫

……

山岳懇談會暫定規約

一、廣く同好の士相互間の親睦を圖り相互の啓發を目的とす。

一、出席者は日本山岳會員並に一般同好の士とす。

一、毎回毎に日本山岳會員二名交替世話人として事務を負擔す、世話人は今會の席上次會世話人を推薦す。

一、事務所を日本山岳會內に置く。

一、會費は出席者各自その都度實費を負擔す、但し通信費その他事務費は日本山岳會負擔す。

一、會合は不定期、但し當分の間年三回乃至四回とす。

一、出席希望者は日本山岳會內山岳懇談會世話人宛に豫め通告し、その氏名記入方を申込むものとす。

……

會務報告

代表者變更

東京高等師範附屬中學校桐蔭會山岳部　代表者　山口　俊作

會員計報

東京市　山村孝三氏（昭和四年十一月入會、會員番號一一三八）

昭和十年四月四日逝去せらる、本會は玆に謹みて哀悼の意を表す。

圖書基金に關する報告

本誌第四三號にて本年度圖書基金募集を發表したる處、多數會員諸賢より御申込を得た、圖書係の名に於て玆に謝意を表する。五月末日迄の分左の如し、

圖書基金申込會員氏名

東京

細川　景正（一口）田邊　主計（一口）

山根　雅男（一口）加藤　保二（一口）

柴田　潤藏（一口）若林兩次郎（一口）

酒井　忠一（一口）大谷　光明（一口）

辻本　滿丸（一口）槇　有　恒（二口）

太田　新吉（一口）中村清太郎（一口）

鳥山　悌成（二口）松方　三郎（一口）

飯塚篤之助（二口）高野　鷹藏（一口）

吉田　竹志（一口）國分　貫一（一口）

兵庫縣

中原繁之助（一口）今村　幸男（一口）

大島　堅造（三口）別宮　貞俊（一口）

京都

田中喜左衞門（一口）

滋賀縣

井花伊左衞門（一口）

計　二十四名、二十九口

三十週年記念晩餐會

五月四日午後六時より京橋中央亭に於て開かる。圖書展覽會を見てそれからブラ〳〵行ける樣目錄んだのが當つたのか後に記する樣大盛會であつた。殊に發起人、オリジナル、メンバーの元氣盛んなる姿又現役の學生メンバーの山やけした顏を多數見出した事は非常なる喜びであつた。

先づ控室で記念撮影の後、食堂を開き會長、長老を中心に各自任意に席を占め、談笑、隨處に涌く。

食後、高頭會長のトーストにより

山岳會の爲めに乾杯の後、松方、高野、小島と順次、順送りに前者の指名によつて立ち以下辻村太郎、辻、近藤茂吉、別宮、茨木、三田、佐藤とそれ〴〵一說ありさながら「山岳」の活歷史をひもどくが如き盛觀であつた。殊に、何時もながらの小島さんの巧みな話術による Chambalain の話や、この種會合等に出席される事の極めて稀と聞及ぶ辻村太郎氏が「博物の友」と云ふ雜誌に山岳會の廣告があつたので初めてその存在を知り入會するに到つたとの話、茨木さんの「私は本當は非常に若いのだが、年寄とばかりつきあつて居たのでこんなに頭がはげた」說等、印象に殘つた興味あるものであつた。

卓を撤してさらに隣室に到り、紫烟の間に大聲高聲涌き起り十分歡を盡し、終つたのは十時過であつた。

この三十週年にあたり、かくも盛大な山岳會の威容を見、今さらながら力强く感ずると共に來る可き四十週年、五十週年には、この力を土臺として、さらに一歩前進、世界山岳會に何等か意義ある貢獻をなし得べき事を思つたのは筆者のみであつたらうか。終りに、この盛會に槇、藤鳥兩君が出席出來なかつた事を深く遺憾とする。

出席者

高頭仁兵衞　田口一郎　松方三郎
茨木猪之吉　行方沼東　黑田孝雄
小島久太　大熊保夫　高野廣藏
磯野計藏　別宮貞俊　辻莊一
岩永信雄　福田嘉四郎　高木菊三郎
近藤茂吉　本多友司　八木橋豐吉
森田勝彥　村田數之亮　木村一男
伊藤直三郎　廣瀨潔　田村正男
石澤五男　岡本信三　村瀨久保
飯塚篤之助　辻村太郎　岩崎京二郎
岡埜德之助　島田巽　田中菅雄
三田幸夫　谷口現吉　小森宮章正
逸見眞雄　山崎和一　早川義郎
石塚秀次郎　神谷恭三　浦新
佐藤文二　田邊主計　木村鑛吉
吉田竹志　以上四十六名

第六十七回小集會

昭和十年六月六日　於三會堂

一、積雪期の後立山　湯淺巖氏
一、積雪期の劔岳　須賀幹夫氏

第六十七回小集會は、ウエストン時代や山岳美論の後を受けて、久し振りに若い現役の二君に御願ひした。立教大學山岳部に現在居られる湯淺、須賀兩君は、夫々の山に就いて豐かな經驗をもとに、後立山には七年間を、劔岳には五年間を集中した同部の收獲を中心として、總括的に說明せられ、更らに前者は特に鹿島館に於て、後者は特にその西面に於て講演は愈々核心に入つた。兩連峰ともまたゝく間に餘す所なく登りつくされて仕舞つた感があるが、尙今後に何物かの問題が現在殘されてゐるとしたならばおそらくこの兩方面に於てであらうと信ずる。二君の講演は合せて約二時間餘、それより直ちに幻燈を映寫、三十八葉の選りすぐつた逸品はあらゆる方面から眺められた山の姿や更に興味ある種々な場面を一同の前に再現した。

本日集る者九十六名、其の大部分が眞黑に雪燒けした現役學生の諸氏であつたことは一段の活氣を委へ司會者一同の何よりの喜びとする所である。尙當日は兩君の講演を中心に問題を提へて研究する豫定であつたが、時間が遲れてまたの機に讓らねばならなかつたことは、遺憾であつた。今後の小集會も講演を聞いて歸るに止らず、會場に於て參會者一同で討論、研究の交換がなし得たならば一層有意義とならう。

出席者

高頭仁兵衞　佐々木茂索　酒井忠一
稻茂登恒次　宇田川久太郎　田代豐彌
原田恭雄　齋藤威三男　山口清秀
飛川維之　淺原重繼　小林義正
小林太刀夫　鍋倉英夫　吉田竹志
田邊主計　小武海鄰彥　山下助四郎
野口未延　三浦新　飯塚篤之助
神谷恭　矢作太郎　泉眞善
丹羽惠關根太郎　大熊保夫
長澤佳熊　湯淺巖　逸見眞雄
多賀富藏　岡本勝二　伊藤一郎
山田幸太郎　橋本晋七郎　磯貝藤太郎
大野俊夫　岡田友次郎　八木橋豐吉
堀田彌一　國鹽研二郎　安田正介
田口一郎　鈴木正俊　黑田孝雄
井上皓司　東良三　額田敏
櫻井信雄　吉澤一郎　西川信義
松方三郎　三田幸夫　塚本繁松
會員外四十二名

六月定例理事會

六月十三日午後六時半會事務所にて出席、高頭、小島、槇、松方、額田、森田、逸見、櫻井、田口、黑田

一、關西在住理事提案經過報告
一、會員肖像募集ノ件
一、山日記發行報告
一、山岳第一號編輯報告
一、研究懇談會開催報告

五月三十日高橋理事上京を期とし白頭山登攀につきこの種の會合を開催せり、今後引續き催すこと。

一、今三十週年記念事業の一つとして遭難防止並に救援組織の研究をなすこと

新着圖書

佐伯宗作遭難の眞相　中村知一
防災科學　水災と雪災　岩波書店
樹氷（俵、內藤、馬嶋、三氏の遭難報告及追憶）　三高山岳部
登山とスキー六月號　黎明社
寫眞月報　同　小西六本店
山　同　梓書房
ケルン　同　朋文堂
山小屋　同　同
地學雜誌三月—五月號　東京地學協會
山旅　五月號　八王子山岳會
しらかんば　四月號　都島山の會
せふり　五月號　福岡山の會
管見錄　同　大阪管見社
山菜　同　大阪三品山岳倶樂部
山幸　同　阪神山岳會
アルカウ趣味同　日本アルカウ會
ペデスツリヤン六月號　關西徒歩會
山　同　横濱山岳會
泉ゲ嶽　同　七七銀行山の會
山　同　東京山彥山岳會
黑木立　同　關東岳愛會
獨立樹　同　東京山旅クラブ
旅行　同　東京銀行クラブ
旅路　同　關東旅行クラブ
東京カルカウ會報　六月號
變健會ワンダーフォーゲル　同
かゞりび山岳會報　同
東京登歩溪流會報　同
日本登高會報　同
明峰山岳會報　同
がくれい會報　同
山人會報　同
京都山岳會報　同
廣島山岳會報　同
臺灣山岳彙報　同
TMC山岳會報　同
名古屋山岳會報　同
法政大學工業學校山岳部報　三
岡山々岳會報　三、五
みなかみ會報　五、六月號
魚市場山岳會報　五月號
尾ゼの會報　五、六月號
タンネ山岳會報　五月號
三井山岳會報　同

購入圖書

高木利太編家藏日本地誌目錄、正續
高橋白山著　白山文集　全五卷
R. L. G. Irving-The Romance of Mountaineering 1935
F. Bechtold-Deutsche am

Nanga Parbat 1935

會員寄贈圖書

Studers-Hochalpen 1844
Coolidge-Climb; in the Alps made in the years 1865 to 1900
A. V. Haller-Gedicht von der Schönheit u. d. Nuzen der Schmeizerischen Alpen Bern 1772
以上高橋健治氏
John Ruskin-The Two Boyhoods and other chapters and Passages on life and art. (Everymans library)
Adolfo Hess-Psicologia Dell'Alpinista
以上豐湯國臣氏

陸地測量部出版地圖目錄

二萬五千分一地形圖　修正
小千谷近傍　四號　蓬　平　一面
同　十一號　塚野山　一面
高田近傍　二號　柿　崎　一面
富山近傍　五號　五百石　一面
同　六號　東岩瀬　一面
同　十號　伏　木　一面
同　十二號　長　澤　一面
松本近傍　三號　鉢伏山　一面
敦賀近傍　四號　柳ケ瀬　一面
同　五號　河　野　一面
同　六號　杉　津　一面
同　八號　駄　口　一面
同　九號　竹　波　一面
同　十號　早　瀬　一面
同　十一號　三　方　一面
日本原近傍　五號　津山西部　一面
岡山近傍　一號　日　笠　一面
廣島近傍　三號　可　部　一面
同　九號　麥　谷　一面
二萬五千分一地形圖　鐵道補入
尾道及竹原近傍六號　能　地　一面
五萬分一地形圖　修正
高　田　二號　十日町　一面
鹿　兒　島　七號　鹿兒島　一面
同　十號　川　内　一面
花　蓮　港　九號　能高山　一面
五萬分一地形圖　鐵道補入
羽　幌　七號　苫　前　一面
名　古　屋　三號　半　田　一面
二十萬分一帝國圖　修正
岐　阜　一面
二萬五千分一朝鮮地形圖　修正
京城及仁川地方　五號　北漢山　一面
同　七號　冠岳山　一面
同　八號　軍浦場　一面
同　十二號　君子山　一面
同　十八號　仁川西部　一面

昭和十年六月二十五日印刷
昭和十年六月二十八日發行
發行者　額田敏
編輯兼印刷者　逸見眞雄
東京市芝區琴平町一
（不二屋ビル）
發行所　日本山岳會
電・芝・一六四九番
廣告一手取扱　進恒社
電話・四谷・六五四番
多木印刷所印刷

登山靴とピッケル

美津濃ピッケルは鋼材に對して撰定を行ふと共に製作工程に於ては凡て化學的理論に準據して是に品質としての最高價値を與へ使用上最大性能を保持する爲めには力學的基礎に立脚して是が完成を期して居ります。

特に熱處理に就いては他の追隨を許さない獨自の技術を誇つて居ります、ニッケルクローム鋼ピッケル、アイゼンに就いては十二分に自信を有するのです。

ニッケルクローム鋼	ピッケル	¥ 13.00
普通鋼	同	¥ 10.00
ニッケルクローム鋼	アイゼン	¥ 10.00
普通鋼	同	¥ 7.00

登山靴

科學的な研究と熟練せる技術との結晶品です、
靴は登山の快不快を左右致すものです、
絶體に信頼し得る美津濃製靴の
御使用を御奬め致します。

鋲無	¥ 19.00
同	¥ 17.00
同	¥ 14.00
同	¥ 12.50

東京神田小川町通
美津濃
電話3570 3571 神田3572